

2019年度

大阪市立大学大学院法学研究科法曹養成専攻入学者選抜試験

【3年標準型】

小論文試験問題 (配点：200点)

注意事項

- 1 机上に各自の「受験票」を出しておくこと。
- 2 問題冊子は、監督者が「解答始め」の指示をするまで開かないこと。
- 3 問題冊子は、全部で6ページである。
解答用紙は、全部で3ページである。
問題冊子、解答用紙に脱落のあった場合には申し出ること。
解答用紙は切り離さないこと。
- 4 解答用紙の上部所定欄に、1ページには受験番号及び氏名を、2ページ以降は各ページに氏名を忘れずに記入すること。
- 5 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入すること。
- 6 解答以外のことを書いたときは無効とすることがある。

次の文章（宇野重規『保守主義とは何か』中公新書・2016年）を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、出題に際し、一部省略した箇所および表現を変更した箇所がある。

I 丸山^{まさお}眞男と福田^{つねあり}恆存——その存在をめぐって

本書の冒頭で示したようにバークを基準にとるならば、保守主義とは、①具体的な制度や慣習を保守し、②そのような制度や慣習が歴史のなかで培われたものであることを重視するものであり、さらに、③自由を維持することを大切にし、④民主化を前提にしつつ、秩序ある漸進的改革を目指す。

その意味で、単に過去に価値を見出す思考がすべて保守主義と呼ばれるべきではない。まして知識社会学者のカール・マンハイムがいう、変化一般に対する嫌悪や反発としての「伝統主義」とは明確に区別されなければならない。保守主義はあくまで自由という価値を追求するものであり、民主主義を完全に否定する反動や復古主義とは異なる。保守主義は高度に自覚的な近代的思想であった。

そうだとすれば、早くに保守すべき自由の体制を確立した英米の両国で、保守主義が先行して確立したのは不思議ではない。バークの眼前には名誉革命によって打ち立てられた英国国制があり、アメリカには王制や貴族制の過去がなく、むしろ自由主義を建国の思想とする独自の出発点があった。

これに対し、伝統的な政治体制が長く存続し、むしろその打倒が政治的近代化の課題となった国々——世界史のなかでは、こちらが一般的であり、むしろ英米の方が例外的かもしれない——では、伝統を否認する政治的急進主義と、それに反発する勢力とが衝突し、自由な秩序の確立に向けて漸進的改革を主張する保守主義が確立する余地は小さかったといえる。

実際、革命の国フランスでも、長らく「保守主義」は存在しなかった。フランス革命に反発し、ブルボン朝の昔に戻ろうとする「反動」や、これ以上の革命に対しブレーキをかけようとする「自由主義」の勢力は存在しても、現行の政治制度を自覚的に「保守」しようとする勢力はなかなか現れなかったのである。

フランスで「保守主義者」と呼ばれる人の多くは、実際には、正統王朝主義者（ブルボン朝への復帰を願う人々）やカトリック主義者、さらにはナショナリストであり、彼らのほとんどは現行の政治体制への忠誠心をもたなかった。ちなみに、近年、フランスで『右派思想史』という本を書いた研究者がいるが、その著作の副題が「不可能なる保守主義」であったことが象徴的である。

それでは、日本はどうだろうか。日本の政治的近代化の起点を明治維新に求めるか、あるいは第二次世界大戦の戦後改革に求めるかはともかく、それ以前の政治体制との明確な断絶によって近代化が推し進められた点は共通している。その意味では、政治的急進派と

それに対抗する勢力は存在しても、保守主義の確立には難しい政治的土壌であったといえるだろう。とはいえ、はたして日本に保守主義が存在しないと言い切れるか。日本の保守主義についてのいくつかの見解をみておきたい。

第一に検討すべきは政治学者の丸山眞男（1914－96）の保守主義論である。丸山といえ、しばしば戦後日本を代表する「近代主義的知識人」とされ、日本の過去や伝統をもつばら克服すべき対象として捉えた理論家として語られることが多い。しかしながら、丸山の思考ははるかに複雑である。実際、彼の議論を細かく検討するならば、むしろ保守主義、あるいは「健全な保守主義」①とでも呼ぶべきものの欠如を嘆くかのような発言が目立つ。

丸山は1957年の「反動の概念」という論文で、次のように述べている。「日本に保守主義が知的および政治的伝統としてほとんど根付かなかったことが、一方進歩『イズム』の風靡に比して進歩勢力の弱さ、他方保守主義なき『保守』勢力の根強さという逆説を生む一因をなしている」。

きわめてアイロニカルな表現であるが、いわんとするところは明白だろう。丸山の見るところ、日本では、知的にも政治的にも保守主義が明確に定着することはなかった。すなわち、現行の政治体制を自覚的に保守しようとする勢力はついに現れなかったのである。代わりに目立ったのは、漠然と進歩を信じるか、さもなければ、ズルズルと現状維持を好む態度であった（両者は同一の人物のなかで並存することもありえる）。結果として、明確に政治的革新を目指す勢力はつねに少数で、目立ったのは思想なき保守勢力であった。

丸山はある意味で、信念をもった保守主義を望んでいたとさえいえるかもしれない。尊重すべき原理を掲げ、現行の政治体制を自覚的に保守する勢力があるならば、それとの対決を通じて、革新を目指す側も自らの思想と実践を鍛え上げることができる。逆にまた、保守主義の側も、その自覚がより深いものになるであろう。これに対し、明確な保守主義が存在せず、何となくの進歩志向となし崩しの現状維持が横行するとき、すべてはズルズルベッタリとなり、思想的な緊張関係は不在となる。

丸山は『日本の思想』（1961年）のなかで、日本の思想における「座標軸」の欠如を指摘している。あるいはそこに、保守主義の不在という関心とも通底する問題意識を見出せるかもしれない。「あらゆる時代の観念や思想に否応なく相互連関を与え、すべての思想的立場がそれとの関連で——否定を通じてでも——自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に当る思想的伝統はわが国には形成されなかった」。

新しい流行の摂取に熱心な日本の伝統は、次から次へと外来の思想や制度を輸入したものの、それらは蓄積されることも、あるいは相互に関連づけられることもなく、いつしか「忘却」されていった。仏教や儒学に始まり、キリスト教やマルクス主義に至るまで、あらゆる思想は構造化されることがないままに受容されていった。それらはいつのか意識の底に押しやられ、逆にあるとき突発的に「思い出される」。日本の思想とは、その連続であったというのである。

なし崩しの変化はあっても、自覚的な保守主義はついに形成されることはなかった。こ

のような丸山の判断は正しかったのか。さらに他の人物の保守主義論を見てみたい。

次に丸山とは対照的に、戦後日本を代表する「保守主義的知識人」としてしばしば語られる英文学者・文芸評論家の福田恆存（1912－94）の議論を検討してみたい。

とはいえ、実をいうと、福田は自分を「保守主義者」とは考えていない（この点、少しハイエクと似ている）。福田は「私の保守主義観」の冒頭で次のようにいう。「私の生き方ないし考へ方の根本は保守的であるが、自分を保守主義者とは考へない」。

これはどういうことか。福田によれば、保守とはまず態度の問題であって、イデオロギーの問題ではない。そもそもイデオロギーとして先行したのは革新主義である。現状に強い不満をもつ人間が、一定の世界観に基づいて変革を主張する。このような革新主義に対し、反発を覚える自己を認識したものが保守派となる。すなわち、保守は必ず革新に遅れて登場するというのである。

そのような保守派はイデオロギーを必要としない。自らの生活感情に根ざして必要な改革を行えばいいのであり、むしろ「保守主義」なる大義名分をかざして自らを正当化しようとするれば「反動」となってしまう。英文学者である福田は、しばしばエリオットを参照して「文化」とは生き方であると論じたが、保守とは過去を尊重する一つの生き方であり、理屈を振りかざして相手を説得する必要はないと説いたのである。

このような信念に基づき、革新主義や進歩主義を批判し続けた福田であるが、かといって、日本における文化の連続性について、けっして楽観していたわけではない。「日本のばあひ、中世と近世とは、近世と近代とは、それぞれの時代に全体的観念の書きかへを要求されてきた。それどころか、戦前と戦後とでも、書きかへが必要とされたのであります。そんなところに、伝統や歴史の観念は生じるわけがありません」（「絶対者の役割」）。日本の歴史を特徴づけるのは断絶であり、その都度、歴史は根本的に書き換えられてきた。このように断じる福田は、むしろ日本における伝統の不在を嘆いたのである。

福田が日本と対照するのは、ヨーロッパである。宗教改革やルネサンスからヨーロッパの近代が始まったとしばしばいわれるが、その両者も単純な過去からの断絶ではなく、中世以来の漸進的な変化の帰結である。ヨーロッパに特徴的なのは統一性であり、キリスト教を中核にその一貫性は近代にまで続く。これに対し、日本における過去を振り返れば、端的にそこには歴史性が欠けていた。日本の近代で否定すべき神はなく、明治維新で天皇制が持ち出されたのも、ある意味でその空虚さを埋めるものでしかなかったと福田はいう。

福田にいわせれば、進歩主義の自己欺瞞^{ぎまん}は、そのような断絶を正面から認めなかったことにある。「戦前から戦後への転換には連続はない。連続がない以上、それは進歩ではない。進歩主義の立場からは、それを革命と呼びたいであらう。が、事実は征服があつただけだ。征服を革命とすりかへ、そこに進歩を認めたことに、進歩主義の独りよがりと言きがある」（「進歩主義の自己欺瞞」）。福田にいわせれば、戦後改革は占領軍による「征服」であつたが、それを直視しなかったことにこそ進歩主義の誤りがあつた。

福田はさらに、進歩主義にとって、「征服による切断を乗り越えて、なんとか連続を見出し、その懸け橋を造ること、言ひかへれば、征服による疑似革命を進歩の中に吸収せしめること、それが一番大事な仕事ではなかつたか」（同前）と指摘する。福田の見るところ、戦後の進歩主義はそのような仕事を引き受けるどころか、むしろ反動的であるとして退けてしまったのである。

とはいえ、このような福田の議論には、実は丸山の保守主義論と通じるものがある。両者はともに、日本の歴史を貫く思想的連続性の欠如に着目し、結局のところ、明確な伝統が形成されなかったとする点で一致しているからである。その限りでいえば、しばしば対照的に捉えられる二人の人物は、同じコインの表裏の関係にあったのかもしれない。^②

丸山が日本における連続性の欠如を前提に、あえて「虚妄」の戦後民主主義に賭けたとすれば、福田はこれを否認し、むしろ江戸時代以来の民衆の生き方を評価した。人間は過去なしに生きられないと考える福田は、あくまで「態度」としての保守を擁護したのである。

ところで、このような保守主義論と密接に関連する論点として「正統（orthodoxy）」という論点がある。本書でもすでに、英国の保守主義を論じる際、チェスタトンの『正統とは何か』に触れた。チェスタトンにとって正統とは、自らを理性的であるとする人間の驕りを批判するためのキリスト教的な超越性の信仰を意味した。人間が自らを絶対視しないためにも、現世を超えた視点が必要である。チェスタトンにとって、「正統性」とは、そのような視点を与えてくれるものであった。ヨーロッパ社会のなかでキリスト教は、それに対する批判を含め、「正統性」の機軸となったのである。

逆にいえば、ヨーロッパの思想は、「正統」と「異端」との対決の歴史であった。人間の原罪と三位一体の教説を中核に正統的教義を確立したキリスト教には、逆説的ではあるが、繰り返し異端的な教義や実践が登場した。明確な「正統」があるからこそ、それに挑戦する「異端」も生まれる。両者の対抗関係が、キリスト教思想のダイナミズムを生み出したのである。そのような伝統は、「神の死」を説いたニーチェなど、近・現代の思想にまで続いている。

これに対し、はたして日本の思想に「正統」はあるのか。この問題に独特なこだわりを示し続けたのが、実は丸山眞男である。丸山は1950年代の後半、筑摩書房の『近代日本思想史講座』のなかで、「正統と異端」という巻を構想し、自らそれを担う企画を立てている。そのための研究会を断続的に行い、以後、30年近くにわたって検討が続いたという。その狙いは、近代日本における「正統」を天皇制国家に見出し、自由民権運動やマルクス主義をそれに対抗する「異端」として描き出すことにあった。ところが、結局、本は未刊行に終わった。なぜこの企画は実現しなかったのだろうか。

そもそも「正統と異端」という視点が西欧のキリスト教社会を前提としたものであり、日本にうまく適用できないこと、さらに日本語では、‘orthodoxy’と‘legitimacy’がともに「正

統性」と翻訳され、両者の概念的区別が難しいことなど、いくつかの理由があげられるだろう（丸山はこれを「O 正統」と「L 正統」と呼んで区別している）。とはいえ、残された資料などをみると、興味深い指摘がいくつか残されている。

例えば丸山は次のような発言をしている。「日本の自由というものの中のオーソドキシ—そこが西洋の自由と非常に違うところですね。コンスティテューションナリズムというものに媒介されない。（中略）だから機構というものとの対決がない。（中略）フレームがないことが、制度がないことが、自由であるという捉え方……」（藤田省三『異端論断章』）。

本書でもすでに論じたように、バーク的な保守主義があくまで具体的な制度を通じて自由を保持しようとしたとすれば、日本では、自由への主張が具体的な制度や機構と関連づけて論じられず、結果として立憲主義とも結びつかなかったというのが、丸山の診断である。

制度が制度として確立せず、つねに状況化する。このような事態は、戦後においてさらに悪化したと丸山は指摘する。「やはり日本国憲法が定着しないということは——定着しないというのは権力の側のことで、国民の間には定着しているのだけれども——つまり制度としてしっかりしない、制度が状況化している……（中略）それが戦後の非常な特色なんじゃないかと思っているんです」（同前）。

このような丸山の分析が正しいとすれば、日本の政治や思想に「正統」はなく、とくに戦後社会では制度が制度として確立せず、すべてが状況化していることになる。そうだとすれば、日本におよそ保守主義は成り立たないようにも思われる。

しかしながら、丸山にせよ、福田にせよ、そのように論じつつも、戦前と戦後の間の思想と政治における「断絶」を克服し、そこに何らかの連続性を見出したい、あるいは見出すべきだという主張を潜在的に共有している。丸山については、後に触れる「重臣的リベラリズム」論が重要であるし、福田については、「切断を乗り越えて、なんとか連続を見出し、その懸け橋を造ること、言ひかへれば、征服による疑似革命を進歩の中に吸収せしめること」という指摘がきわめて示唆的である。

問 1 「近代主義的知識人」とされる丸山は、なぜ日本における「健全な保守主義」(下線部①)の欠如を問題視したのだろうか。著者の見解を 400 字以内で説明しなさい。
(配点 : 80 点)

問 2 「しばしば対照的に捉えられる二人の人物は、同じコインの表裏の関係にあったのかもしれない」(下線部②)とあるが、丸山と福田はどのような意味で「対照的」であり、同時にどのような意味で「同じコインの表裏」なのか。600 字以内で説明しなさい。
(配点 : 120 点)

<出題の趣旨等 2019年度 小論文>

〔出題の趣旨〕

問1と問2ともに、文意を的確に把握し、それを精密な論理によって表現する能力を試している。

なお、言うまでもないが、他の論述式試験科目と同じく、法科大学院で学ぶうえでの基本的学力として、文章の正確な読解力、論理的な推論、分析、判断を的確に行うことのできる能力、および思考のプロセスと結果とを明確に表現する能力があるかどうか、前提として問われている。

〔配点〕

問1	80点
問2	120点
合計	200点

〔採点基準〕

・問1について

問題文2～4頁の内容を手際よく要約できるかどうか、しかも筆者の立場を丸山真男の立場から区別して説明できるか、がポイントとなる。後者については、単に「丸山はこう考えていた」と論じる答案は減点対象となる。

筆者の考えに依れば、保守主義とは、ある政治体制の下で伝統的に形成されてきた自由を、その伝統を否定する急進主義に対抗して「自覚的」に護ろうとする思想である。しかし、日本の場合にはそのような「自覚的」な思想を生み出す前提が乏しい。筆者の考えに依れば、丸山が問題視したのも、この「自覚的」な保守主義が定着しなかったことである。これがなければ、革新・進歩を目指す勢力も自らの明確化し、定着させることができないためである。こうした点を明確にしながらか適切に記述することが求められる。

・問2について

問1の要約を踏まえて、更に問題文4～5頁の内容から丸山真男と福田恆存の思想の異同を的確に説明できるかどうかポイントとなる。

「対照的」と云える点：

- ① 保守主義について、丸山が伝統を自覚的に擁護する思想と理解するのに対して、福田は生活感情に基づいて改革を行う態度・生き方の問題と捉えている。
- ② 日本の思想・文化の歴史について、丸山は明確な伝統が形成されずなし崩し的な変化が起こるだけと捉えているのに対して、福田は時代ごとに断絶しており歴史性がないと捉えている。
- ③ ①②の態度を踏まえて、丸山は革新・進歩主義を支持し、福田は保守主義を擁護している。

「同じコインの表裏」と云える点：

上記②の相違はあるものの、丸山と福田は日本の歴史において思想的な連続性や伝統が存在しないと捉える点で共通する。

これらの点を明確にしながら適切に説明することが求められる。

以上